

東京湾におけるマコガレイ産卵場の環境について

Environment of Marbled flounder *Pseudopleuronectes yokohamae* spawning ground in Tokyo Bay

石井光廣 (千葉県水産総合研究センター)

Mitsuhiro Ishii (Chiba Prefectural Fisheries Research Center)

m.ishi26@pref.chiba.lg.jp

東京湾は、大都市圏に囲まれた閉鎖性内湾である。自然の海岸線と浅場のほとんどが失われ、流域人口が日本の全人口の 24% を占める。そのため、貧酸素水塊や底質の悪化などの富栄養化問題を抱えてきたほか、秋冬季の水温上昇や海水中の栄養塩濃度の低下など、東京湾の環境は水産生物に大きな影響を与えている。

マコガレイは、東京湾で最も多い異体類で、底びき網や刺網漁業の重要魚種であるが、近年、漁獲量が著しく減少している。そのため、私たちはマコガレイの生活史全般を見渡して、問題点を抽出し、資源増産の方法を探す研究をしてきた。

成長段階ごとにマコガレイの分布をみると、成魚は、夏は貧酸素水塊を避けて南部に分布し、冬は北上して産卵する。仔魚は、ふ化後 1 か月間海中に漂うが、分布は東部に偏った。稚魚は東部沿岸に出現し、貧酸素水塊から逃げ遅れるとへい死するなど主に貧酸素水塊、泥、高水温がマコガレイの生残に大きな影響を与えていることが推定された。一方、マコガレイの産卵場は、仔魚の輸送のために湾奥に位置しているが、沈性粘着卵のため、泥がふ化を阻害する可能性が高いことがわかった。

平成 27 年に東京湾再生官民連携フォーラムから、生き物生息場つくりに関する提案書 (マコガレイ産卵場の底質改善に関する提案) が政策提案され、提案書案を作成した生き物生息場つくり PT では、これらの研究成果が参考にされた。今年、マコガレイ産卵場である茜浜地先では、はじめて底質改善の試みが行われた。

キーワード：東京湾，マコガレイ，生活史，沈性粘着卵，底質改善